

序文とまとめ

大内 尉義*

上田真喜子**

わが国では、食生活の欧米化、生活習慣病罹患数の増加、高齢化社会の到来などに伴って、動脈硬化性疾患が急速に増加している。特に、動脈硬化を基盤とした虚血性心疾患、脳血管疾患などの循環器疾患は、今後ますます増加することが予想される。また、昨年、WHOから発表された2001年の世界死因統計でも、2001年の世界の全死亡、約5,600万人のうち、循環器疾患は死因の約30%を占め、圧倒的に第一位(癌は13%)であることから、循環器疾患の予防・治療は世界的にみてもきわめて重要な課題であると言える。このような背景のなかで、「多角的見地から診た動脈硬化と循環器疾患」が本学会のシンポジウムとしてとり上げられたことは、まことに時宜を得たものであり、企画いただいた隈崎達夫会頭の御炯眼に心から敬意を表したい。

本シンポジウムの前半の3題は、主として動脈硬化のメカニズムや病理・病態に関する最新データの報告であり、また後半の4題は、循環器疾患における新しい治療法や治療動向についての演題であった。

東京大学大学院医学系研究科循環器内科の佐田らは、骨髄由来の血管前駆細胞が流血中に動員された後に血管傷害部に定着して、血管平滑筋細胞に分化し増殖する現象について明らかにし、血管病治療の新たな標的としての骨髄血管前駆細胞の意義を強調した。

信州大学大学院臓器発生制御医学の池田らは、動脈硬化や急性冠症候群の病態における炎症性プロセスの関与について述べ、interleukin-6(IL-6)やmonocyte chemoattractant protein-1(MCP-1)などのサイトカインの発現が重要な役割を担うことを明らかにした。

大阪市立総合医療センター循環器内科の成子らは、新しい測定法を用いて種々の動脈硬化疾患における血漿中酸化LDL値の動態について解析し、ヒトにおける血漿中酸化LDL値の上昇はプラーク不安定性の増強と

密接に関連していることを明らかにした。

順天堂大学循環器内科の代田らは、コレステロール低下療法の心血管イベント予防効果について述べ、わが国の脂質介入試験では、脳血管障害の抑制効果の検討が重要であることを強調した。

熊本大学大学院循環器病態学医学薬学研究部の坂本らは、虚血性心疾患や急性冠症候群の血栓形成における組織因子(TF)やプラスミノゲンアクチベーターインヒビター-type 1(PAI-1)の関与について報告し、特に線溶系のコントローラーであるPAI活性の制御が虚血性心疾患のより効果的な治療において重要であることを示した。

京都府立医科大学大学院医学研究科循環器病態制御学の松原らは、閉塞性動脈硬化やパーチャー病などの虚血下肢に対する自己骨髄単核球細胞移植を用いた血管新生療法や、重症狭心症例に対する骨髄単核球移植治療などについて報告した。

杏林大学医学部高齢医学の秋下らは、エストロゲンの抗動脈硬化作用について明らかにした他、動脈硬化疾患に対するホルモン補充療法の最新データ、問題点、適応などについて述べた。

また、防衛医科大学校防衛医学研究センター医療工学研究部門の栗田明先生には、コメンテーターとして、多くの重要なポイントを御指摘いただいた。

このように、本シンポジウムでは、第一線で御活躍の7名の研究者により、動脈硬化や循環器疾患に関する最新の成果を発表いただくとともに、新たな治療戦略についてもお示しいただいた。また、活発な討議を通じて、循環器疾患の病態とその対策、治療法の新しい展開などについての理解を深めることができたと思われる。本シンポジウムで得られた知的刺激が、動脈硬化や循環器疾患に関する今後の研究のさらなる発展や新治療法の開発につながることを願ってまとめとする。

* 東京大学大学院医学系研究科老年病学

** 大阪市立大学大学院医学研究科病理病態学

2003年5月18日受理